様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２４０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１３４０４

研究課題名（和文）シェイクスピア時代の地中海世界とシェイクスピア作品におけるその表象の解明

研究課題名（英文）Elucidation of the Mediterranean world in Shakespeare's time and its representation in Shakespeare's works

研究代表者
土井　雅之（DOI, MASAYUKI）

文教大学・文学部・准教授

研究者番号：００６１４９９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：シェイクスピア時代の地中海世界は、スペイン、オスマン帝国、ヴェネツィア共和国の三強に占められていたが、スペインのライバルであるフランスは、オスマンと同盟を組んでスペインに対抗し、後にイングランドもフランスと同じ方針を取り、オスマンとの関係を深めていく。シェイクスピア作品に出てくる地中海沿岸の地名は、これまであまり注目されることはなく、作品解釈に重要な意味を持つとは考えられてこなかったが、そのような時代に作品で言及される地中海沿岸の地名は現在の私達が考える以上の意味を持った可能性があると考えられ、本研究では、体系的にその意味を解明することでシェイクスピア作品解釈に新たな知見を加えることを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、イギリスで数度起こったテロや新型コロナウイルス感染症の影響で期間の延長を行ったが、おおむね予定していた研究を実行でき、発表と論文を通じて定期的に成果を公表した。当初の計画通り、シェイクスピア作品を背景となるモチーフによって、スペインとオスマンの対立を作品の背景にした作品群、ベネチア共和国やフィレンツェを舞台とした作品群、地中海上の交易を踏まえた作品群に分類しながらも、個々の作品を論じることでそれぞれの作品世界に浮かび上がる地中海像を確認することを試みた。本研究の意義は、それらを体系的にまとめる過程で、初期から後期までのシェイクスピア作品に新たなアプローチ方法を提示できたことである。

研究成果の概要（英文）：During Shakespeare's time, the Mediterranean world was dominated by three major powers: Spain, the Ottoman Empire, and the Republic of Venice. France, Spain's rival, formed an alliance with Ottoman to oppose Spain, and later England took the same policy as France and deepened its relationship with Ottoman. The names of places along the Mediterranean coast that appear in Shakespeare's works have not received much attention and have not been considered to have significant meaning in the interpretation of the works. In such an era, the names of places along the Mediterranean coast mentioned in his works may have had more meaning than we think today. Therefore, this research attempted to add new knowledge to the interpretation of Shakespeare's works by systematically elucidating the meaning.

研究分野：英米・英語圏文学

キーワード：シェイクスピア　エリザベス朝演劇　地中海世界　地中海貿易　交易と衝突

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

従来の研究では、シェイクスピア作品に地中海沿岸の地名が出てきても、注が付される程度で比較的無頓着に処理されることが多かったように思われる。例えば、初期の戯曲『間違いの喜劇』では、商人イジーオンは、シチリア島の南東部シラクサからアナトリア半島西端エフェソスへ不法侵入をして逮捕されるが、『間違いの喜劇』の材源であるローマの喜劇作家プラウトゥスの『メナエクムス兄弟』においては、エフェソスではなくアドリア海に臨む、バルカン半島西部の港町エピダムナム（Epidamnum、現在のドゥレス Durres）が作品の舞台である。アーデン版の編者 R・A・フォークスはその序文で、「シェイクスピア作品における地理を十分に説明することは不可能で、シェイクスピアは恐らく自分の作品に合うように地理を脚色したのだ」と、エピダムナムからエフェソスへの変更を問題として取り上げることを最初からあきらめてしまっている。

しかし、シェイクスピアの時代では、シラクサはスペイン領、エフェソスはオスマン領であり、イジーオンと同じことをすれば捕まることは容易に想像でき、エピダムナムからエフェソスへの変更によって観客は劇中で起こっていることを自然と受け入れられたのではないか。加えて、エピダムナムとエフェソスでは知名度においても大きな差がある。エフェソスは『ペリクリーズ』では、セリモンの医術によってタイーサが息を吹き返し、後にペリクリーズ一家が再会を果たす地となっているし、トロイ戦争、シェイクスピアの作品で言えば『トロイラスとクレシダ』は、同じアナトリア半島のエーゲ海に接する北西部が舞台であり、これらの地域への関心は当時も高かったと考えられる。『間違いの喜劇』を執筆するにあたって、シェイクスピアは恐らくエピダムナムから、知名度もあり、よりオスマンを連想しやすいエフェソスに変更したと考えられる。

申請者は、以上のようなシェイクスピア作品に出てくる地中海沿岸の地名への先行研究の無頓着さに注目し、2016 年 6 月 4 日（土）に科研費プロジェクト「16 世紀イングランドにおける浮浪者の表象研究」（主催者：学習院大学教授中野春夫）第 6 回研究会（学習院大学）で行なった研究発表「シェイクスピア作品における地中海世界――『テンペスト』を中心に」の前半部分で、シェイクスピア時代の地中海がどのように各作品に描き込まれているかを概説することを試み、地理的・歴史的に研究を深めることでこれまでとは違った解釈を行える余地があることを指摘した。

２．研究の目的

シェイクスピア作品に出てくる地中海沿岸の地名は、これまであまり注目されることはなく、作品解釈に重要な意味を持つとは考えられてこなかった。その証拠にそれらの地名には注釈が施される程度で、一部の作品を除いてまとまった議論がされていないことが多い。

シェイクスピア時代の地中海世界は、カトリックの盟主スペインとオスマン帝国、ベネチア共和国の三強に占められていたが、スペインのライバルであるフランスは、オスマンと同盟を組んでスペインに対抗し、後にイングランドもフランスと同じ方針を取り、オスマンとの関係を深めていく。そのような時代において、作品で言及される地中海沿岸の地名は、現在の私達が考える以上の意味を持った可能性がある。そこで本研究では、体系的にその意味を解明することでシェイクスピア作品解釈に新たな知見を加えることを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、シェイクスピア作品を背景となるモチーフによって、①スペインとオスマンの対立を作品の背景にした作品群、②ベネチア共和国を舞台とした作品群、③地中海上の交易とそれを脅かす海賊を作品の現実感の後ろ盾とする作品群に分類し、1 年目に①（『間違いの喜劇』、『から騒ぎ』、それらに関連して『ペリクリーズ』、『冬物語』）を、2 年目に②（『ヴェニスの商人』、『オセロー』、『じゃじゃ馬ならし』、『ヴェローナの二紳士』、『ロミオとジュリエット』）を、3 年目に③（『ヴェニスの商人』、『十二夜』、『ヘンリー六世・第二部』、『ハムレット』、『ペリクリーズ』）を扱う。地中海を支配するスペイン、オスマン、ベネチアの三大勢力を順に押さえ、最後に、それらの国々と時に友好、時に敵対の関係を築きながら、地中海商業圏に入り込もうとしていたイングランドの姿がそれらの作品に投影されていることを具体的に明らかにする。

４．研究成果

平成 29 年度は、申請時の研究実地計画に従って、シェイクスピアの『間違いの喜劇』と『から騒ぎ』について研究発表を行う。

先ず、『間違いの喜劇』については、平成 29 年 6 月に第 56 回シェイクスピア学会での研究発

表に応募した。採用が決定すると、同年 9 月の Stuart 朝研究会、第 54 回秋例会（専修大学神田キャンパス）にてプレ発表を行い、十分な準備をした上で、10 月のシェイクスピア学会（近畿大学東大阪キャンパス）にて、研究発表「‘where any honest men resort’――『間違いの喜劇』におけるエフェソス像解析」を行った。本研究は、当時の東地中海情勢を踏まえつつ、『間違いの喜劇』における都市エフェソスのイメージを読み解くことを試みた。申請前の平成 28 年度に行った、スペイン王国とオスマン帝国の対立を軸に『テンペスト』と当時の西地中海情勢を考察した、2 回の研究発表と 1 本の論文執筆（最終的には、「『あらし』から浮かび上がる西地中海像」と題する）との関係性に注目を得た。

次に、『から騒ぎ』については、平成 29 年 6 月に日本英文学会東北支部第 72 回大会での研究発表に応募した。採用が決定すると、上述した『から騒ぎ』の研究発表準備と同時並行で、準備を行い、同年 12 月、日本英文学会東北支部第 72 回大会（東北大学川内南キャンパス）にて研究発表「『から騒ぎ』から読み取る上演当時の国際情勢への関心」を行った。本研究は、作品の時代背景と主筋に加えられた材源からの変更点との関係性を説明しながら、こうした変更点によって『から騒ぎ』が当時の国際情勢への関心も組み込んだ喜劇となったことを論証し、それを読み解くことを試みた。翌年 1 月、第 30 回エリザベス朝研究会（慶應義塾大学日吉キャンパス）にて、同研究のポスト発表を行う。ここ 50 年の『から騒ぎ』批評を踏まえた上で、主筋の変更点に注目する本研究は評価を得る。

平成 30 年度は、地中海を中心とした交易品についての調査を発展させて、2018 年 10 月、第 57 回シェイクスピア学会のセミナー2「シェイクスピア劇と同時代の娯楽・風俗文化」にメンバーとして参加し、研究発表「居酒屋、酒、シェイクスピア」を行う。応募し採用が決まった後は、同年 9 月に、エリザベス朝研究会第 33 回にて研究発表「シェイクスピア作品におけるワイン」を、また、Stuart 朝研究会第 57 回秋例会にて研究発表「シェイクスピアと飲酒文化」を行い、報告と修正を重ねて本番に挑む。充実した資料を添えての発表は評価を得る。

平成 29 年度に行った研究発表「『から騒ぎ』から読み取る上演当時の国際情勢への関心」を 2018 年 9 月に『日本英文学会第 90 回大会 Proceedings（付 2017 年度支部大会 Proceedings)』にて報告を行う。また、同じく平成 29 年度に行った研究発表を基に、*Shakespeare Journal* に論文を投稿し、査読を受けた上で掲載される（Vol. 5 (58)、2019 年 3 月、題名を『“where any honest men resort” ――『間違いの喜劇』に見る東地中海への興味とそのイメージの変化」と変更する)。

依頼を受け書評を執筆し、査読を受けた上で掲載される。(「勝山貴之著『シェイクスピアと異教国への旅』」、『英文学研究』第 95 巻、2018 年 12 月。)

東地中海を舞台にした『ペリクリーズ』についての研究発表を 2 回行う。(「ペンタポリスに響くのは竪琴か剣戟か――『ペリクリーズ』の結婚エピソード論考」、2019 年 3 月、学習院大学中野春夫教授科研費プロジェクト「シェイクスピア劇の小唄――テクストに埋め込まれた聴覚的連想イメージコード」主催第 7 回研究会。「材源、類話との比較から『ペリクリーズ』を考察する――第 2 幕を中心に」、2019 年 3 月、エリザベス朝研究会第 35 回。)

シェイクスピアはベネチアを舞台に『ヴェニスの商人』（*The Merchant of Venice*）と『オセロー』（*Othello*）の 2 作品を書いている。令和 1 年度（平成 31 年度）は、創作年に数年の開きがある、その 2 作品を一緒に論じることで、地中海世界の中心に位置するこの国際港湾都市に、当時のイングランド人がどのような関心を持ち続けたのかを明らかにすることを試みた研究発表を行う。

まず、Stuart 朝研究会第 60 回秋例会にてプレ発表を行い、いただいた意見から修正を施して、次に、2019 年 10 月、第 58 回シェイクスピア学会にて、本番の発表「シェイクスピア作品におけるベネチア」を行う。質疑応答の時間いっぱいに複数の質問や意見を得る。

日本シェイクスピア協会の研究年刊 *Shakespeare Studies* の査読委員となり、4 本の書評の査読を担当する。本研究の参考にもなる新しい文献を読む機会となる。

2019 年 12 月 25 日（出発）～30 日（帰国）の間、ロンドンに出張する機会を別の研究活動で得られ、合間の時間に、本研究用に現地調査、情報・資料収集を行う。シェイクスピア時代を中心とした、地中海世界の表象を美術館で絵画作品に確認したり、地中海世界との交易によって輸入した調度品を博物館で見学したりすることができた。

年度末に、Stuart 朝研究会とエリザベス朝研究会の 2 つで研究発表を行う予定であったが、新型コロナウイルスの影響で中止となる。ただし、それぞれの研究発表のためにしていた準備は、2020 年度の研究活動に活かせるものである。

令和 2 年度は、前年のベネチアに続き、イタリアの中部の都市フィレンツェを舞台にした、『から騒ぎ』、『オセロー』、『じゃじゃ馬ならし』、『終わりよければすべてよし』のシェイクスピア 4 作品を取り上げた研究発表「シェイクスピア独自のフィレンツェ像はどのように形成されたのか」を行う（2020 年 7 月 6 日から 15 日まで（全てのプログラムが同一期日)、日本英文学会第 92 回全国大会ウェッブカンファレンス)。本発表では、シェイクスピアがその都市像を形成する上で参考にしたと考えられる、同時代に出版されたフィレンツェ関連本での都市の説明や、他の作家たちによるその都市についての記述を踏まえ、広い視野からシェイクスピア独自のフィレンツェ像を明らかにすることを試みた。

地中海世界との交易を経て発展したロンドンの商業、特に宿泊業と飲食業に注目した研究発

表「シェイクスピア時代のロンドンの宿泊業と飲食業――演劇との関係を中心に」を行う（2021年3月13日（土）、科研費プロジェクト「娯楽文化史からとらえるエリザベス朝演劇――社会変化が生みだす総合エンターテイメント」第3回研究会（オンライン開催））。地中海世界との交易（ワインの輸入）が盛んになるに連れて、急速に発展した宿泊業と飲食業を歴史的・地理的に説明することを試みた。当時は区分けがはっきりしていたイン、タヴァーン、エールハウスそれぞれの商業施設の役割を、演劇との関係を中心にしながら論述した。

令和3年度は、地中海世界との交易を経て発展したロンドンの商業、特に宿泊業と飲食業に注目した昨年の研究を発展させて、2021年10月9日（土）第59回シェイクスピア学会（Zoomによるオンライン開催）において、研究発表「文献から探るルネサンス期ロンドンのワインとタヴァーン事情」を行う。

本発表では、最初にワインの輸入量とタヴァーンの店舗数の増加を取り上げた。16 世紀半ばにワインの輸入が増えた理由の2つ、1つは貿易ルートの確立、もう1つはロンドンの受け入れ態勢の整備を確認することから始めた。ワインの輸入量が増加したことは、ロンドンでのワインの消費地であるタヴァーンの店舗数も増加したことも意味している。タヴァーンが犯罪の温床となっていること、過度の飲酒をもたらすことが問題視されつつも、ロンドンの消費文化の場として大きな意味を持ったことを論証した。

次にペスト流行の飲食店への影響を考慮した。ペスト流行が飲食店にどれほどの影響を与えたのかを示す一次資料はないが、記録が多く残る1665年の大流行から遡ることで、シェイクスピア時代の対策の不十分な点を確認し、船頭たちの嘆願やトマス・デカーの『驚異の年』からの推測を行った。

最後に『ヘンリー四世』2部作を中心としたタヴァーンの場面について論述した。これらの作品でのタヴァーンの描写が特異なのは、タヴァーンを舞台にする場面をそれぞれの作品から取り出して繋げると、イーストチープにある一軒のタヴァーンの記録ができあがることである。ハルが即位するまでの過程を描く連作劇の合間を使い、「あるタヴァーンの記録」あるいは「タヴァーンの女将一代記」を作成している。それぞれの作品では数えるほどだが、タヴァーンの場面はイベントが盛りだくさんであり、前後の場面とのテンポの違いから印象に残るのである。

研究発表終了後には、一次資料の徹底した調査を評価するコメントをいただいた。

令和5年度は、2012年1月7日（土）開催の日本英文学会関東支部冬季大会において行った研究発表「亡霊の台詞を聞き逃すな――亡霊の登場場面から *Hamlet* を考える」を基に、専修大学人文論集112号において、論文「亡霊の登場場面から『ハムレット』を考える」の執筆を行う。本論では、クローディアスの我欲が、自然の成り行きを醜く歪めたことを衝撃的に伝える亡霊の台詞が、『ハムレット』を楽しむ上で欠かせない主要点であることを論じた。

2022年10月2日（日）に甲南大学で開催された、第60会シェイクスピア学会・セミナー1「劇作家の仕事」でコーディネイターを務める。本セミナーは、演劇作品実現での諸段階における創作行為の実相を、創作の背景としてではなく、作品の読解を中心にして考察した。個人では「『オセロー』の脇役たちから見えてくるシェイクスピアの省エネ作劇術」の発表を行った。

2023年3月11日（土）に九州大学西新プラザで開催された、科研費プロジェクト「エリザベス朝英国史劇における民衆のイングランド王国表象」第4回研究会で研究発表「‘little England’からの歩み　ジェイムズ朝中期の歴史認識と『ヘンリー八世』」を行った。フランス、スペイン、ローマの影響下にある「リトル・イングランド」（‘little England’）から、ジェイムズ一世の「グレート・ブリテン」（‘Great Britain’）構想の基礎といえるものが築かれる時代を概観するこの戯曲には、材源の歴史認識に加えて、統治10年を迎えたジェイムズ朝の歴史認識が関係している。本論はその歴史認識と『ヘンリー八世』における材源からの変更部分との関係を考察することを試みた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 土井雅之	４．巻 第90回
２．論文標題 研究発表報告「『から騒ぎ』から読み取る上演当時の国際情勢への関心」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『日本英文学会第90回大会Proceedings（付2017 年度支部大会Proceedings）』	６．最初と最後の頁 131-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土井雅之	４．巻 95
２．論文標題 書評「勝山貴之著『シェイクスピアと異教国への旅』」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『英文学研究』	６．最初と最後の頁 73-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土井雅之	４．巻 5 (58)
２．論文標題 論文「“where any honest men resort” ――『間違いの喜劇』に見る東地中海への興味とそのイメージの変化」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Shakespeare Journal	６．最初と最後の頁 66-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 土井　雅之
２．発表標題 文献から探るルネサンス期ロンドンのワインとタヴァーン事情
３．学会等名 第59回シェイクスピア学会（Zoomによるオンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 土井　雅之
２．発表標題 シェイクスピア独自のフィレンツェ像はどのように形成されたのか
３．学会等名 日本英文学会第 92 回全国大会ウェッブカンファレンス
４．発表年 2020年

１．発表者名 土井　雅之
２．発表標題 シェイクスピア時代のロンドンの宿泊業と飲食業――演劇との関係を中心に
３．学会等名 科研費プロジェクト「娯楽文化史からとらえるエリザベス朝演劇―社会変化が生みだす総合エンターテイメント」第3回研究会（オンライン開催））
４．発表年 2021年

１．発表者名 土井　雅之
２．発表標題 シェイクスピア作品におけるベネチア（プレ発表）
３．学会等名 Stuart朝研究会第60回秋例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 土井　雅之
２．発表標題 シェイクスピア作品におけるベネチア
３．学会等名 第58回シェイクスピア学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 土井雅之
２．発表標題 シェイクスピア作品におけるワイン
３．学会等名 エリザベス朝研究会第33回
４．発表年 2018年

１．発表者名 土井雅之
２．発表標題 シェイクスピアと飲酒文化
３．学会等名 Stuart朝研究会第57回秋例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 土井雅之
２．発表標題 居酒屋、酒、シェイクスピア（セミナー2「シェイクスピア劇と同時代の娯楽・風俗文化」にメンバーとして参加）
３．学会等名 第57回シェイクスピア学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 土井雅之
２．発表標題 ペンタポリスに響くのは竪琴か剣戟か――『ペリクリーズ』の結婚エピソード論考
３．学会等名 学習院大学中野春夫教授科研費プロジェクト「シェイクスピア劇の小唄――テクストに埋め込まれた聴覚的連想イメージコード」主催第7回研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 土井雅之
２．発表標題 材源、類話との比較から『ペリクリーズ』を考察する――第2幕を中心に
３．学会等名 エリザベス朝研究会第35回
４．発表年 2019年

１．発表者名 土井雅之
２．発表標題 ‘where any honest men resort’ ――『間違いの喜劇』におけるエフェソス像解析（プレ発表）
３．学会等名 Stuart朝研究会第54回秋例会
４．発表年 2017年

１．発表者名 土井雅之
２．発表標題 ‘where any honest men resort’ ――『間違いの喜劇』におけるエフェソス像解析
３．学会等名 第56回シェイクスピア学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 土井雅之
２．発表標題 『から騒ぎ』から読み取る上演当時の国際情勢への関心
３．学会等名 日本英文学会東北支部第72回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 土井雅之
２．発表標題 『から騒ぎ』から読み取る上演当時の国際情勢への関心（ポスト発表）
３．学会等名 第30回エリザベス朝研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関